〈侵略文学〉の文学史・試論

小峯和明*

〈侵略文学〉の範疇

先頃、広義の「戦争文学」ではあるが、戦記ものや軍記ものジャンルをあえてずらすかたちで、「侵略」をめぐる種々の言説を概括して〈侵略文学〉とする、あらたな枠組みを提起した。「琉球文学と琉球をめぐる文学」（『日本文学』二〇〇四年四月）、「〈侵略文学〉の位相―蒙古襲来と託宣、未来記を中心に、異文化交流の文学史をもとめて」（『国語と国文学』二〇〇四年八月）、「薩琉軍記解題―東アジアと侵略文学」（池宮正治・小峯和明編『古琉球をめぐる文学言説と資料学　東アジアからのまなざし』三弥井書店、二〇一〇年）がそれで、主に薩琉軍記を起点に蒙古襲来などに説き及んだものであった（以下、「前稿」と略称）。具体的には、蒙古襲来の言説、神功皇后の三韓侵攻神話と八幡縁起、聖徳太子伝の新羅や蝦夷帰服譚、朝鮮軍記、薩琉軍記、蝦夷軍記等々を含む広域のテクスト群が対象となる。その後、薩琉軍記を中心に検証を進めている目黒将史がこれに島原天草軍記を加えるべきことを提唱したが（「〈薩琉軍記〉の物語展開と方法―人物描写を中心に」『立教大学日本文学』九八号、二〇〇七年、他）、さらにはキリシタン伝来にともなう反キリシタンの物語群も該当することにごく最近気づかされた。各テクストの全貌調査と基礎的な注解をふまえた詳細な追究は今後を期すほかなく、前稿の繰り返し部分が多くなるが、ひとまずおおまかな見取り図を提起しておきたいと思う。

従来の軍記や合戦ものではなく、あえて〈侵略文学〉と銘打ったのは、特に一九九〇年代から二〇〇〇年以降の、湾岸戦争から九・一一のテロ事件を契機とするアフガン、イラク侵攻など世界的な戦闘が引き起こされた現実的な背景がある。軍記、合戦ものという既存ジャンルの枠内に封じ込めずに、あえて「侵略」という、一方からの戦闘を惹起する行為がもたらすものに焦点をあわせ、侵略をうながす心性や侵略される側の内面などもあわせて、侵略行為をめぐる言説や物語の本性を追究したいと考えるにいたったものである。このあらたな概念や枠組みによって従来の軍記、合戦では充分とらえきれなかったものがみえてくるのではないか、という見通しや予見から事は始まっている。

この方面の研究としては、ごく最近刊行された金時徳『異国征伐戦記の世界―韓半島・琉球列島・蝦夷地』（二〇一〇年）及び翌年の井上泰至との共著『秀吉の対外戦争―変容する語りとイメージ』が新しい研究として注目される（いずれも笠間書院）。従来の戦国軍記や近世実録物といったジャンル論の次元を越えた、あらたな路線が拓かれてきた。しかしながら金著書では一貫して「征伐」なる語彙が使われ、加害者側の視点に依拠する傾向が強い。この金著書の朝鮮軍記や目黒将史の薩琉軍記の研究などをうけて、二〇一一年十二月に青山学院で異国合戦

*立教大学文学部教授

をめぐるシンポジウムが開催され、おおきな反響があった。佐伯真一のコーディネート、金時徳、目黒将史、徳竹由明、松本真輔等々の講師陣で、朝鮮軍記や薩琉軍記に加えて、義経や朝比奈の北方伝説、聖徳太子伝の蝦夷・新羅侵攻譚などがとりあげられた。このシンポジウムの報告は笠間書院から刊行される予定である。

稿者のいう〈侵略文学〉に対しては、金著書に「多面的な戦争の一面のみを重視するという印象を与えかねない」と批判されており、私にいう〈侵略文学〉論の本意を充分認識しえていないと思われるため、小稿でも再度確認しておきたい。

〈侵略文学〉の概念の特徴は、侵略する加害者側のみならず、侵略される側の被害者面からも侵略の言説をとらえようとする双方向の視野を持つ点である。たとえば、十三世紀の蒙古襲来を例にすれば、日本が一方的に侵略される側に立たされ、根深い被害者意識を植え付けられたが、同時にそれを神風によって撃退したという反転の言説が永く日本人のトラウマ意識を培い、呪縛し続けた。この蒙古襲来を契機により強まったのが対外的な守護神への信仰であり、その象徴が八幡大菩薩であったが、あわせてその八幡の母たる神功皇后の朝鮮侵攻の神話が甦生することにもなる。それらのいわば中世神話ともいうべき言説は『八幡縁起』に集約され、託宣やおびただしい言説を集成した『八幡愚童訓』も作られた。

もとより神功皇后の神話は『古事記』『日本書紀』に語られるところであり、仲哀から応神・仁徳へのいわゆる河内王朝への王統交替説のつなぎに神功皇后が浮上することは周知の通り。とりわけ仲哀の死を契機に神功皇后みずからが応神を懐妊したまま新羅侵攻に赴くさまは、古代においてはそれほど表面化はしなかったし、もとより百済救援を除いては朝鮮侵攻の実体もなかった（対馬をはじめ近隣の島嶼や海域では緊張関係は常にあったであろうが）。しかし、その実体のなさが逆にどの時代にもあてはめうる通時代性や融通無碍な意味を付与させることにもなった。

唐・新羅の連合軍に対して百済の救援に向かって白村江で大敗を喫するとか、女真族のいわゆる刀伊の入寇とか、対外的な緊張関係が高まると、神功皇后神話が呼び起こされたであろうが、何といっても蒙古襲来を契機とする国際関係の危機意識の高まりがおおきかった。八幡大菩薩の喧伝と神功皇后のそれはほとんど連動している。八幡の母なるものへの回帰ともいえるであろうか。神功皇后はほとんど闘う女神にほかならない。蒙古襲来以降も、たとえば、「応永の外寇」においても、蒙古・高麗への恐怖が先行し、海上で突如出現して奮戦する女人が幻視される。それが神功皇后像にほかならないことは言うまでもなかろう（『看聞日記』）。神功皇后神話は時代とともに巨大化し、その子応神即八幡即阿弥陀の習合説とともに浸透し成長していった。神功皇后神話は蒙古襲来を契機に中世神話へおおきく変貌したとみるべきで、中世において確固たる地位を占め、近代にも持続するのである。

蒙古襲来は、日本が一方的な被害者意識を植え付けられた事件として永く人々の深層に屈折した対外意識や異国観念を醸成した。この被害者観はともすると振り子が逆におおきく波動するように、加害者観に転ずる場合があった。蒙古襲来そのものは、たとえば『蒙古襲来絵詞』などの絵巻をもたらしたが、一般的には軍記系のような物語言説には成長することがなかった。したがって、軍記、戦記、合戦ものの観点からは視野に入りにくくなる。

これに対して、〈侵略文学〉の場合は、まさに蒙古襲来こそその範疇の中核に位置づけられるわけで、その言説がきわめて重要な意義をもつのである。蒙古襲来がいわば、〈侵略文学〉なる範疇を呼び覚ましたと言い変えてもよいだろう。繰り返すが、〈侵略文学〉は侵略する側のみならず、侵略される側をも対象にするから、加害と被害の双方向からの視界がもとめられるのである。とりわけ蒙古襲来は、被害者観から加害者観に容易に転化する点でもその意義は重い。

八幡縁起や神功皇后の中世神話を浮上させ、活性化させたのも蒙古襲来のなせるわざといってよいだろう。これらはいずれも軍記や合戦ものなど従来のジャンル観ではとらえきれない。あらたな〈侵略文学〉の概念がもとめられるゆえんである。

私論では、こうした〈侵略文学〉論をさらに「異文化交流の文学史」論の枠組

みでとらえかえそうとしており、必然的に国際関係史や対外交流史との連関が基軸となり、東アジアの文学史論への展望が課題ともなる。そのような観点に立つと、日本を取り巻く東アジア世界にかかわるものにひとまず対象がしぼられてくる。蝦夷、琉球、朝鮮、中国等々が主対象となるが、たとえばベトナムなども、モンゴルの侵略を受けて果敢にこれを撃退しており、明清時代においても常に侵略の危険にさらされていた。朝鮮もまた三国時代から唐などの侵攻を受けていたし、高麗時代にはモンゴルに制圧され、朝鮮王朝時代もまた明清との緊張関係が絶えなかった。日本だけに限定された被害者観が意味をなさないことがこれらの事例だけでも明らかであり、常に東アジアの視野からの展望がもとめられるだろう。近年、提唱される漢字漢文文化圏のかかわりもあり、できれば今後さらにベトナムまで視野に入れていければと思う。

以上、〈侵略文学〉の範疇について可能な範囲で現段階での見通しを提示してみた。今まで繁簡あわせて主に論じたものは、蒙古襲来をめぐる諸言説、神功皇后神話、薩琉軍記、蝦夷軍記などである。前稿と種々重複するけれども、その後の研究の進展などもあわせて、ここであらためて概要をまとめて述べておきたい。

〈侵略文学〉の様相

蒙古襲来に関してはすでに前稿で神仏の託宣記、日蓮の未来記などにもふれた。ここでは後に知り得たあらたな資料についてふれておこう。まず中世の法会唱導集の『金玉要集』八に「異国蒙古人滅給事」の一節がある。これも八幡縁起にまつわる内容で、弘安四年に禅林寺法王が八幡宮に参拝、西大寺の思縁房に異国調伏のため、二百五十の僧に百日間の尊勝陀羅尼法を修させる。新院の夢に童子が現れ、神功皇后ゆかりの満珠干珠を差し出す。結願の時、声をひとつに唱えると、雷電振動し、八幡神が顕現、西をめざして去る、はたして博多まで襲来した蒙古勢を撃退した、という。

また、『棚橋蓮華寺縁起』にいう、

蒙古、日本ニ責来リ、中国ニ通リ播磨ノ国、須磨明石ノ浦マデ責ケル。仍テ王城近ク競ヒ来ル間、天下大ニ操動セリ。

蒙古の侵略が九州どころか中国地方の播磨の須磨明石浦まで及び、京にも近いと大騒動になったという（鈴木義一「仙宮院秘文の研究」）。おそらく当時の風聞などが背景にあろうが、それだけの危機意識をもたらしたことを伝えている。あるいは、『花園天皇宸記』正和三年（一三一三）閏三月十九日条に、

如円上人語、（略）住吉社第三宝殿扉開鎖切、誠不思議也。是為異国降伏也。先々蒙古襲来之時、件社有此瑞云々。

とあり、住吉社の蒙古襲来時の奇瑞が後年に追認される。蒙古襲来が記憶され続けたことをうかがわせる。

さらに蒙古襲来における一次的な資料にとどまらず、その後も永く呪縛された様相をもあわせて拾っていくと限りがない。たとえば、これも前稿でふれた幸若舞曲の『百合若大臣』も朝鮮侵略が課題となっており、神戦さから神人連合の戦いの様相を呈している。後述するが、『伴天連記』をはじめとする近世の反キリシタン文学の物語群にまで蒙古襲来言説はかかわっているのである。

ついで神功皇后三韓侵攻と八幡縁起に関しては、たとえば、対馬歴史民俗資料館蔵『対馬州八幡宮御鎮座伝』があり、神功皇后の侵攻の往復に対馬に寄るさまが記される。対馬からとらえた視点が注目されよう。

書誌は、写本一冊、袋綴。外題「対馬州八幡宮御鎮座伝」、題簽・金泥地。端作り題「神功皇后新羅征伐対古伝」。表紙・絹、茶。縦二七・一、横一九・〇㎝。二十七丁。一面九行。近世中期の書写か。内容は仲哀八年、クマソの反逆を征討しようとした帝が塵輪の放つ毒矢に当たって亡くなり、妊娠中の神后が代わりに新羅に侵攻し、凱旋するというもの。冒頭でクマソは小国だからむしろ宝国を追討すべきとされる。宝国とは神宝玉が出る国で、もとはスサノヲが支配しており、日本の海辺を侵犯し対馬を属国にしようとしている。ということでそれが新羅にすりかわったかたちで、新羅に侵攻する展開となる。これも中世神話の一環としてある言説とみなせよう。

神后は六月に下県の豆酘に到着、多久頭神社、奈伊良神社などに寄り、七月に与良村に着き、船浮神事を行い、腹白石を冷やす。鴨居瀬浦、大千尋藻浦、佐賀浦、鷲見浦、「海宮之通路」とされる琴浦等々をめぐり、西泊浦、鰐浦などを経て神風や潮満玉、汐涸玉により、新羅を制圧、例の「日本之犬」を石に刻み、木坂山に帰還、八流幡がなびき、清水山の八幡新宮などにより、十二月に筑紫に凱旋したという。以上の概要が「木坂山八幡本宮鎮座伝」で、その後に「清水山八幡新宮御鎮座伝」が語られ、放生会について述べられる。そして、「和多都美神奉称八幡之義」にふれて閉じられる。

本書はいわば、神功皇后の新羅侵攻前の対馬巡幸記のような体裁になっている。対馬の南部から北部へ北上し、朝鮮半島に向かい、再び凱旋するさまが浦々や神社名の列挙によってその行程が浮かび上がってくる構図である。神功皇后侵攻の対馬ご当地版といってもよいだろう。

またここではふれる余裕がないが、『八幡縁起』は絵巻にもなっている作例が少なくない。イメージの問題からもさらに検討が必要である（メラニー・トレーデの精力的な研究がある）。

次に朝鮮軍記をとりあげよう。これに関しては、はじめにふれたように、金時徳のまとまった成果があり、異国合戦の物語への眼が開かれてきたといえるが、目黒将史による金時徳著書の書評（『説話文学研究』47号）にあるように、朝鮮軍記ものの総体は必ずしも明らかではなく、多くは今後にゆだねられている。朝鮮軍記の場合は後述の薩琉軍記と対照的に版本でひろまり、また、被害者の朝鮮側からも多くの言説、テクストが生み出された。すでに韓国では膨大な『壬辰倭乱資料集成』が刊行されており、これらをあわせて総合的に考察する必要があるだろう。ことに『懲毖録』が刊行されて、それが日本にも伝わり、和刻本が出版されるに及んで朝鮮側をも視野に入れた言説が出るようになる。侵略した側とされる側の双方からの言説やテクストを総合的に検証しうる例として貴重である。書名でいえば、『朝鮮軍記大全』『朝鮮軍記』などさまざまであり、その系統論も緒に就いたばかりで、まだ全貌はつかめていないといわざるをえない。なお、先述の金時徳論以外に、崔官「戦争・記憶・想像力―以文禄之役（壬辰倭乱）為中心」（『日本文学研究・多元視点与理論深化』日本文学研究延辺大学十二届年会論文集、青島出版社、二〇一二年）がある。

また、あわせて版本の挿絵もイメージとテクストの相関やメディアとの関連を問う上で欠かせない対象である。たとえば、有名な例に加藤清正がオランカイで東海域をはさんで遠くはるかに富士を遠望する図がある。もちろん実際に富士が見えるわけではなく、大陸側から日本を遠望することで、逆に日本から大陸の領土を認識させる植民地への野心や欲望をかきたてる効果を担ったといえる。版本の挿絵に限らず錦絵なども該当するだろう（ドナルド・トビ「環日本海の富岳遠望」『日本海学の新世紀2』（角川書店、二〇〇二年））。

前稿で特にとりあげた薩琉軍記に関しては、その後、目黒将史が精力的に追究してかなりの成果をあげた。これによると、薩琉軍記は主に写本で流布しており、すでに百数十点もの写本の存在が明らかになり、版本の刊行はわずか一点のみであった（『絵本琉球軍記』）。刊本は挿絵付きで、朝鮮軍記のそれとも共通性がある。目黒論ではこの写本群を数系統に分類し、始発は比較的簡略だったものが次第に内容が増幅して成長していった過程を跡づけ、十巻本の『島津琉球軍精記』をはじめ、それらとはまた別系統でまとめられた『琉球属和録』や『薩州内乱記』など大部なものに至る様相が解明された。また、それらの多くが貸本屋での流通を媒介にしており、書写の過程で多様に変成していったことが想定されている。海禁時代（いわゆる鎖国）にあって琉球は異国であり、対外戦争の意味合いを持ち、地名も人物も合戦も架空のもので、まさに幻想の侵略ものが創造され、読みつがれていたのである。

二〇〇九年に、立教大学史学会で薩摩の琉球侵略から四百年をめぐるシンポジウムが開催され、歴史学と文学研究とがあいまって活発な議論が交わされた。従来は歴史研究としてのみ問題視されていたものに、薩琉軍記を主とする文学も加わったところにおおきな意義があると思われる。その成果は立教大学史学会『史苑』一八三号（二〇一〇年）に掲載されている。

この薩琉軍記のあるテクスト（早大本『島津勲功琉球軍記』）の末尾に、神功皇后の三韓侵攻をはじめ、蒙古襲来、秀吉の朝鮮侵略がまとめて記述されていたことが、そのまま〈侵略文学〉論自体の着想の契機ともなったわけで、ここの一文は一連の対外戦争を個々に切り離すのではなく、前近代の東アジア〈侵略文学〉として包括すべきことを示唆している。

ついで北方の蝦夷軍記に関しては、まだ研究が充分つみあげられていないが、近年、北方史資料集成が出て、蝦夷軍記の代表的な伝本が紹介され、見通しがきくようになってきたといえる。たとえば、シャクシャインの乱を描いたものが多いが、そこでもやはり、蒙古の影がみえるし、あるいはお伽草子の『御曹司島渡り』が引かれたりする。蝦夷が逆襲に出て本州の半分を制圧される展開などもみられ、侵略・被侵略の反転現象がここにも出てくる。

この蝦夷に関しては、聖徳太子伝も関連し、新羅、蝦夷という域外との関係性が問われていた。慰撫や帰服の問題である。これについては、前田雅之「「鬼神」と「心正直」―中世太子伝の蝦夷形象をめぐって」（『文学』二〇〇五年三・四月号、五・六月号）がある。あるいは、坂上田村麻呂とアテルイ、前九年、後三年の乱などもかかわってくるだろう。これに北をめざす義経や朝比奈義秀などの武人譚もある。南の為朝に対する北の義経という構図である。金時徳論にもみるように、蝦夷と琉球という日本の植民地化の問題にも結びつくのである。

そして、これらについで、島原天草軍記がある。おそらく朝鮮軍記、薩琉軍記、島原天草軍記の三つが近世軍記の柱になるであろうし、これらにせり出すことで、従来の『平家物語』『太平記』中心の軍記史観を相対化し、根本的な枠組みを更新する契機を担っているとみることができるだろう。島原天草軍記は乱そのものは侵略とはいいがたいが、キリシタン問題が背後にかかわる一揆であり、対外関係や国際関係からみても、無視しがたいものがある。何よりその伝本の多さ、多様さにおいて群を抜いており、全貌をつかむのは容易ではない。すでに実録ものからの研究はみられるが、今後の課題として多く残されている。島原天草を拠点に起きた一揆はキリシタンと結びつけられ、ほとんどキリシタンの西洋による日本征服の幻想を植え付けることになる。それが島原天草軍記の帰着するところであろうし、さらには反キリシタンものの物語群にもあてはまるのである。

反キリシタン文学の世界征服幻想

近時、キリシタン文学論の一環として述べたところであるが、キリシタン文学の表現のもつ戦闘性に対して、当然ながらキリシタン反撃の言説や著述もまたたくさん生み出された。従来、排耶書と呼ばれ、近年は反キリシタン文学とされる。とりわけ島原天草の乱とその後の海禁政策によって、バテレン幻想が肥大化し、キリシタンはイメージのなかに封じ込められていく。そこに胚胎するのがキリシタンによる日本征服幻想である。現実的な戦うキリシタンの存在が形作られていくのである。この問題はおのずと後世からみる十六世紀という、対象化される時代の課題につらなる。以下、すでに述べた拙稿「キリシタン文学と反キリシタン文学再読―闘う文体」（『文学』二〇一二年九、一〇月号）とほとんど重複するが、まだ一般に共有されていない分野であるため代表例を列挙し、個別にみていこう。

①『伴天連記』（『吉利斯督実記』）慶長十一年（一六〇六）以後、島原天草乱以前
②『吉利支丹物語』寛永十六年版（一六三九）
③鈴木正三『破吉利支丹』寛文二年（一六六二）
④浅井了意『鬼利志端破却論伝』寛文五年（一六六五）以前刊
⑤『吉利支丹宗門来朝実記』享保頃か
⑥『南蛮寺興廃記』
⑦多福寺蔵「排耶史料」宝暦十一年（一七六一）以前

①は飯島幡司蔵写本、茨城県歴史資料館蔵写本が存、『続々群書類従』巻一二、比屋根安定『吉利支丹物語他三種』（吉利支丹文庫第一輯・警醒社、一九二六年）、新村出『海表叢書』巻一（更生閣書店、一九二七年）に翻刻される。

また、これとは外題が異なるが同内容に『吉利斯督実記』写本（国会、内閣、東大他）がある。内容は複数の物語からなり、キリシタン文学ともいうべき七つのサカラメントに続き、リシヤ姫と伴天連ロマンが愛しあい、王の横恋慕で両眼が抜かれるがデウスのはからいでもとに戻る物語、「これは日本にて、タウインビセンテの作りなし也」とある。洞院ビセンテは養方パウロの子で、ともにローマ字本の聖者伝集成『サントスの御作業』を翻訳したことで知られる。ついで、伴天連ヘルナンドと乳母サビイナが王の病気平癒の恩賞でキリシタン布教を許される。「良摩にての比丘尼の始まり」という（『海表叢書』）。

そして、シャムロウに渡海し、布教、迫害を受ける物語で、まずモンテフラタに渡海、北方に金輪際から生い出でた「白銀の島」があり、「高麗山」ともいわれる「黒鐵の鞭にて世を治むる国」だとし、貿易船を装う。苦労して「日本秋津島のうち薩摩」に到着、「モンテフラタとも云ひつべし」。良魔（ローマ）に戻って軍備再編、モンテフラタに攻め寄せ合戦し、その島は日本と知る。「船より放す鉄砲石火矢の音は、ただ虚空を響かして夥し。モンテフラタの者どもは、ただ弓鑓長刀などの物ばかりなり」。そして「天狗風」なる嵐に遭遇、船団は壊滅する。

東を見れば、傘を百も並べたる程の光りもの二つ三つするかと見れば、時も移さず不思議の悪風こそ吹きたれ。東風南風一度におろし合ひ、木を折りて吹くかとすれば、十方の辻おろし一度に来つて揉み合ひ、十六万の船ども同志打して堪へ難し。

まさに神風で撃退される十三世紀の蒙古襲来の結末そのものであり、そのトラウマの再演のごとき描写である。かろうじて船一艘が助かって逃げ帰る。十六年後、大将フランシスコが百十六万騎、四四艘の「良摩の御旗本の船」を率いて、人質のジャホン人の寿庵を案内人として攻めるが再び嵐に遭遇、フランシスコは島に上陸して中国への便船で渡唐、エツに三年いて、ラウマに帰還。その後、二度派遣するも戻らず、一五六〇年、伴天連ガウヅメ、カヒタンドクロイゴを派遣、薩摩坊之津に到着。隻眼の了西ロレンソがキリシタンに帰依し、良魔に帰還後、再びフランシスコ、ガスハル、ロレンソたちが日本の豊後へ。日本への中継に大唐の天川を拠点とし、四年後にまた日本に派遣し、松浦平戸着。「これ、我が朝の吉利支丹始まりの根本なり」という。

そして、平戸事件、伊藤甚三郎とシニヨロの刃傷沙汰があり、翌年は横瀬浦、大村殿が帰依、長崎を拠点とし、次第に繁昌する。慶長九年二月中旬、博多も繁昌、黒田甲斐殿や平戸出身の里庵が足の悪瘡治療を機縁に帰依。慶長十一年（一六〇六）三月二十一日、長崎に伴天連ら集合、評定する。肥後には中浦寿里庵がいて、長崎が良魔に相当、浦上を公領から切り離し領有を画策する。大村に千々石清左衛門がおり、

かの人は、むかし伴天連に付き良魔に渡り、十ケ年学文してのち日本に帰り、エキレンシヤのユルマンして居たりしを、伴天連を少し怨むる仔細ありて寺を出づる。大村殿に奉公す。吉利支丹の昔より国を取る事をよく知りたる故に、ゼスキリシトの謀事、サンチヤアゴの戦、日本に度々諸勢を向けたる道理など、いと細かに語りければ、

ついに伴天連は追放され、

それよりしてこそ、吉利支丹の邪道の談合は、唯いたづらに成り果て、次第次第に世も狭くなり果てぬるなり。

実際に起きた出来事や実在の人物もたどりつつ（中浦ジュリアン、千々石ミゲルなど、特に有名な少年使節の名もみえる）、さまざまな事象をまぜあわせて作られた、まさにキリシタン渡来の歴史叙述である。一六〇六年の長崎会議をふまえて書かれたもので、島原天草の乱よりは前の成立とされる。日本征服幻想がすでに見られるし、キリシタン文学をも内包する点が注目される。

ついで②の『吉利支丹物語』は島原天草の乱後に書かれたもので、寛永版が多数残り、その再版である寛文五年版『吉利支丹退治物語』では絵入り本となっている。寛文版は稀書複製会本があり、『続々群書類従』、『海表叢書』巻二、『吉利支丹文庫』第一輯、『思想闘争史料』第十巻などがある。

とりわけ、さざえの殻に鼻を見立てるなど、キリシタンの風貌を描いたり、天狗になぞらえる描写があり、異人への差別偏見が増幅している。また、キリシタ

ンの儀礼や所作にも関心が払われ、伯翁居士と伴天連の宗論も語られる。やがて島原天草一揆になり、叙述が進むが、末尾に「異国の夷きたり、魔法を弘め、仏神をないがしろに破り棄て、日本を魔界と為さん事、嘆かしいかな、口惜しいかな」という文言もみえる（寛文版なし）。

④の浅井了意『鬼利志端破却論伝』もよく知られるが、島原天草の乱が中心で、下巻は③鈴木正三『破吉利支丹』の注釈である（『仮名草子集成』所収）。古浄瑠璃『天草物語』（『天草四郎』）もほぼ同じである。

何といってもこの系統で最も増幅されて流布したのが⑤『切丹宗門来朝実記』である。写本でひろまり、二百点近くあるかと思われるが、外題が不統一であるため、実数がつかみにくく、全貌をとらえるのは容易ではない。架蔵本に限っても八点あり、奥書のあるものに『切支丹興廃録』明和八年（一七七一）、『切支丹実記』天明八年（一七八八）、『切支丹由来実記』天保三年（一八三二）、同・明治十九年（一八八六）、『切支丹来朝実記』嘉永六年（一八五三）、『吉利支丹宗門来朝実記』安政六年（一八五九）、ほかに『切支丹宗門実記』、『幾里志太無来朝記』などがある。翻刻は『吉利支丹文庫』第一輯。今、架蔵の明和八年本による。

概要は、南蛮国の合尾甚大王が日本征服を志し、右将軍天力と左将軍呉輝大臣、武闘派と知略派が対立する。

南蛮国と云は、西は天竺と那陀国、南は鳥馬国、北は蜀国に続き、東は漫々たる蒼海也。国の広さ十万里也。其国十二国あり。日本より西南に当て、海上凡三万七千余里也。

という位置関係にあり、南蛮四十二ケ国が日本を度々攻めたけれど、一度も勝てず、北狄の泉皇帝が攻めても神国で神明の守護強く、勝てなかったという。三千里西に天倫峯という所に宇留岸破天連、富羅天破天連など外道術を使う切支丹がいて、呉輝大臣の脅しが成功し、宇留岸が日本へ赴く。王がいうに、

術法を弘めさせ、日本人を帰伏させ、其後大軍を以て、責め随へ、我が領国と成べき望なり。彼国は小国也と云ども、神国仁義の国、並々の事にては帰伏せまじ。随分道術を以て人々を睦し給ふべし。

と、七種の宝物（遠眼鏡、近眼鏡、猛虎の皮、鉄砲、伽羅、蚊屋、四十二粒のコンタンツ・数珠）を持参し、一年半で長崎着。信長と対面するが、宇留岸の風体は以下の通り。

身の長け九尺余、頭赤小さく、目丸くして黄也。鼻高く、耳は肩にかかり、口広く、歯は馬の如く雪より白し。爪は熊の如く長く、髪鬚は鼠色、年は五十計と見へ、身にはカイトと云ふ物を着し、木綿の様なるもの也。

永禄寺（南蛮寺）を建立するが、叡山が反発、強訴に及ぶ。宇留岸の要請で南蛮王は富羅天も派遣、布教活動を展開。長崎を避け、壱岐の国分、国府→若狭小浜→大津→南蛮寺というルートを使い、貧苦病人の救済事業、三世の鏡で来世を見せる。クルスによる儀礼にもふれる。やがて信者が拡大し、荒木村重と高山右近などが出て信長は後悔する。

秀吉の時代になり、ハビヤンが中井半兵衛の母に接近し、その縁で天正十三年九月十三日に白翁居士と宗論を行う。これは『吉利支丹物語』の延長であり、かなりデフォルメされる。秀吉は蒙古襲来の先例を長々と語り、キリシタンの弾圧を始める。南蛮寺破却、伴天連送還、宗門改めと続き、ハビヤンやシュモンは逃走、市橋荘助、島田清庵と改姓し、堺の医者になり、評判を聞いて秀吉に招かれ、妖術を披露、秀吉にかかわる幽霊を見せ、逆鱗に触れ、拷問、処刑される。そして島原天草の一揆に至る。宝暦五年（一七五五）が比較的、奥書の早い起点か、写本の書写年次による異同がみられる。

①の『伴天連記』などに比べると、歴史上の事件がふまえられているが、その反面で南蛮世界への幻想がひろがり、日本征服への畏怖が蔓延し、妖術使いのバテレン伝承もうかがえる。江戸時代の語りの現在からキリシタンを軸に前代の信長・秀吉の時代を対象化する歴史叙述になっている。

いずれにしても、『吉利支丹宗門来朝実記』にいたって近世期の反キリシタン文学としての物語系の歴史叙述が完成するといってよい。その影響度は何より写本の点数の圧倒的な多さに如実にあらわれている。

ついでこれと深く関わるのが、⑥『南蛮寺興廃記』である。これも写本も刊本

も多く、ここではその系統の改編本と思われる架蔵の『切支丹発起』宝暦十一年（一七六一）写本をあげておこう。外題は「切死丹発起」だが、内題上に朱書で「南蛮寺興廃記」とある。同名は東北大狩野文庫本（天保一三写）などがある。『切支丹根元記』をもとにするというが、この本に関しては不明、基本は『吉利支丹宗門来朝実記』の改編とみてよい。

南蛮切支丹国といふは、国号イズパニヤ（并ホルトガル、カステラ）といふ。海上日本里程一万二千余里、世界の国を以て見る時は、唐土、日本よりは、西方に当る国なり。然るに南蛮と号することは、この国の従属の亜媽港、呂宋など、日本の南方に当れり。故に南蛮と号するもの歟。アマカハ、ルスン等は、日本より里程八百里にて、殊に日本より南に当り、イスハニヤの隣国にも非ずして、その国の従属たることは、アマカハ、呂宋などは守護もなき島なる故、南蛮人往々にその島に船を留め、今は南蛮人おほく住居するが故に類属の国なりと云へり。イスハニヤ隣国に、エケレスといふ国あり、イギリスとも云ふ。阿蘭陀の西に在る島国なり。日本里程一万千七百里といふ。このイギリスは、南蛮国と別種なる由いひ伝ふ。然れども、イズハニヤ、アマカハ、ルスン、イギリス、この四国は、寛永十一年より日本来船停止なり。

やはり結末は島原天草の乱にいたるが、『吉利支丹宗門来朝実記』の幻想性を是正し、その世界観に世界地図の知識をふまえた見解がうかがえる。巻末に雪窓宗崔『邪教大意』がつく。この雪窓宗崔が臼杵の多福寺に残した資料が⑦で、『覚』『喜利志祖仮名書』からなり、前者は先にふれたが、後者は「喜利志祖宗門記」「きりしたん十二門派之事」「異本伴天連記」などがあり、最初の「宗門記」はキリシタン文学そのものといえ、アダムとイヴ、雪のサンタマリアなどが出てくる。最後の作は「異本」とあるが、『伴天連記』に同じである。

以上、駆け足で代表的な反キリシタン文学の物語群をたどってみたが、海禁時代における幻想の異国合戦が強く意識される。②以降はすべて島原天草の乱に収束する。異国、異人、異物への並々ならぬ関心がこのような物語を産み出す。宗教を隠れ蓑にしたキリシタンの侵略、征服への畏怖が根底にある。時代とともに西洋諸国への知識は増えるとともに、知見のない領域が暗部となって、より幻想を肥大化させていくことにもなる。そこではしばしば十三世紀の蒙古襲来の記憶が呼び覚まされ、キリシタン渡来とイメージがまぜあわされる。まさに対外認識のトラウマである。

これらの一連のテクスト群はキリシタンというあらたな文化の伝来をいかに受けとめ、時代のゆくたてをいかに見すえるかという、葛藤の軌跡にほかならない。キリシタン文学が宗教の戦争と言語の格闘から「闘う文体」を築いていったように、キリシタンとの言語による内なる戦いを演じ、キリシタン時代の十六世紀を対象化していったのである。これらの言説群を荒唐無稽として退けるのはたやすいが、何故にここまで創り出されなくてはならなかったのか、そこにみえる精神構造や世界観、対外認識のありかが問われる。いつの時代でも国際関係に苦慮し続けている日本人の心の襞をこれほどかいま見せてくれるテクスト群はないといってよい。これらの言説を今の我々がまた対象化しなければ〈近代〉も見えてこないのではあるまいか。排耶書とか反キリシタン文学は用語そのものがすでに否定的な意味合いが強いが、ここで見たように、否定すべきキリシタン文学の世界を内包し、表出している点でそれもまたキリシタン文学に含み込まれる。表裏一体としてとらえるべきで、世界への窓を開いた描かれた十六世紀像として意義深い。

以上、〈侵略文学〉の枠組みを提示すべく、いささか性急な粗描を試みた。個々のテクスト調査と読み取りをふまえた総合的な検証を今後の課題としたい。